口頭発表Ｂ②

社会人ボランティアを活用した教養教育

齊藤隆仁[1)]、佐藤高則[1)]、大橋眞[1)]、嵯峨山和美[2)]、中惠真理子[2)]、光永雅子[2)]
1）徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部
2）徳島大学全学共通教育センター

１．はじめに

現在の日本では少子高齢化に伴って大学教育においてはユニバーサル化が進行し学習意欲の低下が懸念されている。一方、いわゆる団塊の世代が定年退職を向かえつつあり、生涯教育の充実や社会貢献における活躍が望まれている。こうした状況を踏まえ全学共通教育においては社会性形成科目群における共創型学習科目を中心に地域社会人を社会人講師として活用して一定の成果を上げてきた。[1), 2)]

学生、教員、社会人の間の相互のコミュニケーションの場は相互に学習機会をもたらす存在であることから、それを『学びのコミュニティー』と位置づけ、授業内だけでなく課外活動においても三者の学びを構築し、社会に目を向け現代の諸課題に対処できる豊かな発想ができる人材の教育を目的として、本プログラムが計画された。全学共通教育の社会性形成科目群および教養科目群の授業のいくつかが対象授業となり、加えて課外活動において地域社会人を活用した学習、対話の場を設けて実施している。ここではこうした取り組みの全体についての報告を行う。

なお、本取り組みでは多様な活動を行っているため、ホームページおよび毎週発行のニュース「週間 学びのコミュニティー」(ホームページにて閲覧可能）にて公開している。

ホームページのアドレス：

http://w3.ias.tokushima-u.ac.jp/sgp/

２．実施する授業

平成 21 年度は教養 5 科目（受講者 360 名)、社会性形成科目群の共創型学習 15 科目(受講者 227 名)、ヒューマンコミュニケーション 3 科目（受講者 97 名）において本プログラムの授業が実施された。授業の中での地域社会人の役割として、

- 授業は一般の学生と同様に受講する。
- 一般学生からの発言が少ないときに、社会人は議論の間を取り持つ役割を果たす。
- 学びのコミュニティーによる活動として授業内だけでなく、授業外でも定期的なミーティングや不定期なフォーラム・シンポジウムなどを設けている。これに積極的に参加して、授業中における社会人の参加の仕方などの議論にご参加し、教育改善の活動に協力する。

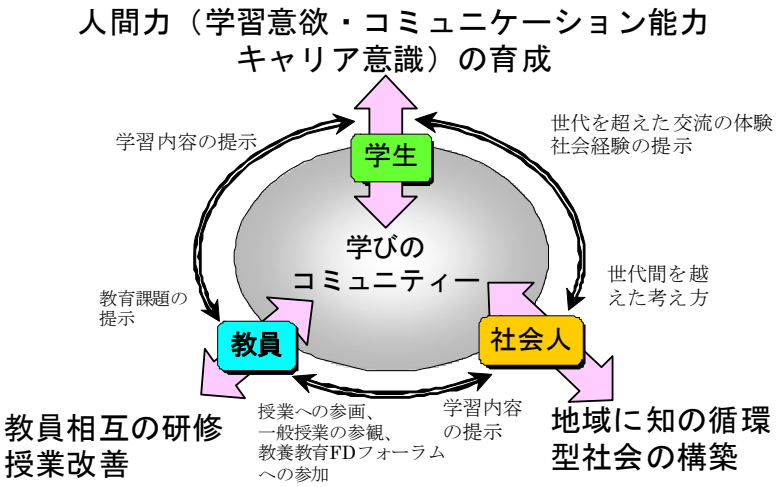

図１　学びのコミュニティーの概要

- 相互授業参観等による学び合いの機会に積極的に参加する。

といた点を事前に了解してもらった上で各授業に参加してもらっている。

学生に対するアンケート（平成 20 年 7 月）として、社会人の授業に参加を肯定的にとらえる学生は 70%を超える。モチベーションの異なる地域社会人が授業に参加することで、身近な他者の視点に気づき、自らの学習の動機を問い直すきっかけになる場を提供する点が重要であろう。また社会人に対するアンケートにおいても「ふれあいコミュニケーションは最高の学習方法」、「共に学び考え話し合うのは、新方向性の力」、「学生さんと学ぶのはユニークな試み」と肯定的な評価が多い。また、授業を参加して学生とは視点が違うことを実感するという発言が多く、学びのコミュニティーを通じて学生とのコミュニケーションの大切さを実感し、社会人ボランティアとしての意義を洞察される場ともなっており、今後の地域社会人の学習に対するモチベーションの変化が期待される。

３．課外活動

本取り組みでは学生が地域社会人・教員とともに授業外で学習する場を積極的に設けている。この活動は、授業で知識を教え込まれる効率的な教育から離れて、共に学ぶことを通して本来学習者が持っている能動的に学ぶ喜びを引き出し、学習に対するモチベーションを高めることをねらいとしている。これまでに、世界各地と「Skype で交流」、世界各地との交流を発展させるための韓国語講座・中国語講座・モンゴルの歴史学習、食・薬・健康を題材とした「実用健康学」、毎月指定図書を決めて行う「読書会」、星や日食、流星などの観察を行う「星空鑑賞会」などが継続して実施されている。また活動の中から学生の自主学習活動組織「Hatoba」が生まれている。

４．世界各地の地域社会人との交流

本取り組みを実施していく中で、大学が地域社会に学ぶべきことは沢山存在することが明らかになり、その活用によって大学教育を大きく変化させる可能性を持つことが示された。これまで大学では教室で授業を行うことが主流であるため、物理的に大学と距離の遠い地域社会人との交流が困難であったが、インターネットが普及し、Skype 等の遠隔通信ソフトを用いることでコミュニケーションが容易になった。こうしたツールを利用して、徳島における遠隔地だけでなく、一気に世界各地の地域社会人と交流する場が可能となりつつあり、本取り組みでも課外活動を中心として交流を試行している。これまで日本語を学ぶ韓国、中国、モンゴル等の学生と交流があり、こちらはコミュニケーション能力の涵養と教養の活用に、相手は日本語会話の実践の場として実施するため、両者にメリットが存在する。今後多様な利用を模索していき、大学と地域社会が対話する場が存在し、有効に機能することにより、大学が真の意味で地域貢献を果たしているといえるであろう。

５．おわりに

本取り組みでは、地域と大学に広がる学びのコミュニティーを形成し、知の循環型社会を構築していくことを将来展望として描いている。地域社会人の人材バンクを充実するとともに、他大学と連携してプログラムを充実させることを継続して実施することによりその実現を目指したいと考えている。

本報告は文部科学省　平成 20 年度質の高い大学教育推進プログラムにおける「地域社会人ボランティアを活用した教養教育～地域に広がる知の循環型社会の構築を目指して～」の一環である。

参考文献

1) 齊藤隆仁他　創成学習「つたえること」と「ものづくり」大学教育研究ジャーナル第 3 号 p. 58
2) 大橋眞他　共創型授業における社会人活用の展開　大学教育研究ジャーナル第 5 号 p. 13